
All Days Horgie

加藤 大志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

All Days Horgie

【Nコード】

N4235BA

【作者名】

加藤 大志

【あらすじ】

旧友の訃報を聞き、伊波利月は渡米する。旧友の名前はランディ・ホーグ、通称オールデイズ・ホーギー。彼はかつてメジャーリーグの舞台上で眼前に立ちはだかった天敵だった。ホーギーの故郷であるフィラデルフィアへ向かう機内で、利月はかつて共にしのぎを削った彼のことを思い出す。

前回の投稿作と同じ登場人物で短編集的に書いたものです。コンセプトは「海外ドラマ風・野球狂の詩」。

旧友の訃報を聞き、私は今、フィラデルフィア行きの飛行機の中にいる。現役を引退してから日本に住むようになったが、人生の半分以上をアメリカで過ごしてきたため、私の中ではまだアメリカに帰国するという感覚だ。

私の名は伊波利月。高校を卒業後、トライアウトを経てMLBのロサンゼルス・バツカニアーズに入団、数年前に引退した後はこうして人様に当時の思い出話を語っては日銭を稼いでいる、しがない物書き見習いである。

その旧友と最後に言葉を交わしたのはほんの半年ほど前の話で、その時の彼からは少しの死の兆候も感じられなかった。当然だ。日々人並み以上に節制し、見た目だけならば三十台半ばでも通じようかという彼はまだ52歳で健康そのもの。なんだそれなら、と実年齢を聞いた皆さんに納得されかねないので一応断っておくが、こと彼に関して言うならば、年齢など大きな問題ではない。そもそも彼は、未だ現役の野球選手として飯を食っている、いや、いた男なのだ。

旧友の名はランドレル・エイドリアン・ホーグ。通称ホーギー。ミドルネームと彼のとてつもないタフさにちなんでオールデイズ・ホーギーなどと称されることもある。彼はそのあだ名をとても気に入っており、サインなどでも必ず「A・D」と記す。陽気で、タフで、そして誰よりも野球に真摯で、言い換えるなら野球にイカれている男。そして私にとってはフィールド内でもっとも敵に回したくない男だった。

どうしてもっとも敵に回したくないかというところ、彼は実際に私を完膚なきまでに打ちのめした敵だったからだ。とはいえ、あくまで私が一方向的にそう思っていただけ。そもそもホーギーは、世界記録でもある脅威のアンタツチャブル・レコードをもつ稀代の盗塁王、リ

ツキー・ヘンダーソンをして「自分の記録を超える可能性を持つ男を一人挙げるといふならホーギーをおいて他はいない」と言わしめたほどの男だ。私とは比するべくもない超一流のプレイヤーだった。まさに私は敵ではなかったのだ。

現実には記録を超えることはできなかった。彼がMLBにおいて積み上げた盗塁数は941個。歴代二位につけたところで彼、ランディ・ホーグの名はMLBの選手名鑑から姿を消してしまったのだから。とはいえ、先に述べたとおり、野球から足を洗ったわけではない。

「いつでもお呼びがかかったら、いく準備はできているさ。マイナー契約だろうがなんだろうがね。タフなチャレンジかもしれないが、やれる自信はあるよ」

ホーギーはここ五年ほど独立リーグに籍を置いていた。自分がまだトップリーグでやれることを証明するためのプロセスとして、どちらかといえばただ野球をしたいという理由だけで。

「両足が切り落とされない限り、俺は走るのをやめないよ。皆知つての通り、俺の武器は足だ。この武器が錆つかない限り、俺自身がそう思わない限り、俺はこの武器を使わないなんて真似はできそうもないね。そして、俺の武器が錆びちゃいないことは、これもまた皆知つての通りさ」

彼は現代科学でもどうしようもない年齢から来る衰えに真っ向から反逆して見せていたのだ。衰えたとはいえ、それでも尚、自身を持つ最高の武器である足を信じていた。彼以外の皆も信じていた。足だけならば超はつかないまでも未だ一級の実力であると。だが、どの球団も彼には見向きもしなかった。先の長くない「足だけの」中年よりは、先のある「足だけの」プロスペクトを選ぶのがあの世界の道理だ。たった二十五人（あるいは四十人）のMLBロースターに名を連ねるには彼はいささか歳をとりすぎていた。人によつては彼のことを引き際を誤った過去の英雄と見るものもある（彼のあだ名を揶揄してオールディーズ・ホーギーというタチの悪いフレ---

ズを見たことがある)。

だからといって、彼が二十一世紀最高の野球選手の一人だったことを疑う余地はない。まさにオールデイズ。彼が一日中でも走り続けられるタフな走力を持つリード・オフ・マンだったことは、野球に少しでも興味のある人なら誰でも知っている。

結局、あんたは天国にまで盗塁しかけやがったわけか……

私はゆったりとシートに背を預け、日本でもっとも格式高いことでお馴染みのスポーツ新聞を取り出した。遠く日本にいても伝わってきた、それでもこちらではそう大きくない扱いの、驚くべきニュースがそこには記されている。

『ランディ・ホーグ急死 頭部に受けた死球が原因』

記事によると頭部に死球を受けたものの何事もなく立ち上がり盗塁まで決め、次の打席でも四球を選び、一試合二つ目の盗塁を決めようかとスタートを切った瞬間の出来事だったらしい。死因は頭蓋内血腫。やはり頭部への死球が決定的なダメージを彼に与えていたのだ。

誰を責めることもできないゲーム中の事故。私もその事実には納得している。なにより、少なくともホーギーという男は、死球を受けて喜びこそすれ、怒りを見せたことは一度もない。塁上にいるときこそ、静止した時が動き出すあの瞬間、投手が投球のモーションを始める瞬間こそ、彼がもつとも輝きを見せる時間なのだから。

だが、起こりえる事故だったとはいえ、やはりメディアもこう書き立てざるを得ないし、私も一瞬とはいえ考えることを止めることはできない。所属していたのがもしも、最高峰のメデイカルスタッフを持った煌びやかな表舞台、MLBのどこかのチームだったならば彼の死は避けられただろうか。すぐにでもその場から離れ、病院へ行つたなら。

いや。

不謹慎なことだが、思わず私は口元が緩んでしまった。隣に座っていたビジネスマン風の男が訝しげな視線をこちらに向けたので、

私は目を閉じて寝た振りを決め込んだ。

残念ながらそんなことはありえない。私の知る限り、オールデイズ・ホーギーは足が動く限り、誰の制止も振り切って走り続けるはずだ。それがMLBであろうと、誰の目にも止まらない独立リーグの試合であろうと。

そうやって味方に流れを持ってくる。それが彼だ。いつだって私はそれを信じていた。自分にはそれを決して止めることはできないということも。

私は閉じたまぶたの裏に、彼との思い出を再生し始めた。到着まで時間はたつぷりである。皆さんにそれをお話する時間もたつぷり。皆さんのほうがそれを許容できる時間をお持ちかどうかは私には分からないが、お付き合いいただけるならこれに勝る喜びはない

「あ、」私はフライトアテンダントの気配を感じて、起き上がった。「すまないんだが、サンドイッチを。フィラデルフィア風で」

ホーギーと初めて出会ったのは私が二十二歳のとき、メジャー昇格二年目のことだった。

前年のセプテンバー・コールアップ（9月を迎えるとMLBのロースターは40名に拡大するため、若手が起用されやすいことを指す）からこっち、ありがたくも球団の私の評価は日増しに高まっている最中だった。日本から良い選手がやってくる場合に大抵付き物の高い落札額を必要としないマイナー契約の拾い物の若造が、幸運にもわずか二年という時を経るだけでものになりかかっている、その幸運に、球団も私も少々のぼせ上がっていた。

私はついにメジャー契約を勝ち取り、開幕からバッカニアーズのコーナーストーンを守り続けていた。二度とマイナーに戻りたくない私は必死に、それこそがむしろにプレーした。甲斐あって打撃も守備も結果の方は上々で、同じくようやく上達し始めた英語のおかげでチームメイトとのコミュニケーションも上々だった。

「ヘイ、リツキイ」

五月中旬、そんなある日の試合前、昨年から私の教育係を自認している投手陣のリーダー、ジョニー・ブラックウツドは私に声をかけてきた。後年になっていくら感謝してもし足りないほどの借りを作ることになる男であるが、それはまた別の話。当時の私にとっては信頼すべきただの兄貴分であり、同僚であり、先生であり、友人であり、相棒に過ぎなかった。

私は彼を睨みつけた。どうしても許せないことがあったのだ。

「リツキ、あるいはイバだ。何度言ったら分かってもらえるんだ？」

「そう尖がるなよ、坊や。今日はよろしく頼むぜ。予習に余念はねえだろっな？」

からかうような口ぶりだが視線は真剣そのもの。私は神妙に頷いた。

ここで彼が予習という単語を使ったのには理由がある。この日の試合はインターリーグ。日本で言うところの交流戦というやつで、対戦相手は普段は対戦することのないナ・リーグのチームなのだ。実際に肌で感じることでできることは違うが、紙の上の数字や記号、フィルムスタディをしておくこと。つまり予習は捕手である私にとっての義務だった。

「ああ。もう二度とマイナーで暮らしたくはないからね」

「その意気だぜ。お前さんが本物のメジャープレイヤーになったら、要求に従ってやるよ、リツキイ坊や」

「ゲームでは要求に従って投げてくれないと困るんだけどな」

「っ、こいつめ」

豪快に笑って彼は私の肩に手を回してヘッドロックを極めた。たかだか新人王筆頭候補と称される程度の若造が八つも年上の、MLBを代表するような投手に対してあまりに不遜な言動だと思われるだろうが、その通り。当時の私は、消せるものなら消してしまいたい過去ではあるが、天狗になっていたのだ。出来過ぎな結果に自尊心を拡大させる程度の若気の至りは、誰にだって経験があるはず

だろう。

それを許容するだけの器の大きさをジョニーは持っていた。もっともジョニーは私とは違って今も昔も生意気な若造が嫌いではない。ヘッドロックはかなり強く極められていたが。

「まあ、その辺じゃお前さんのことを心配しちやいねえよ。なにせ俺たちは皆、」

「ジョニー！」

呼ばれてジョニーは私から離れると、声の方を見やった。

「よう、ホーギー」小走りにこちらに近寄ってくる黒人の男、ホーギーに、ジョニーは挨拶の拳を突き出した。「今、お前さんの対策について相棒と話してたトコだぜ。バツチリとな」

こつりと軽くつき合わせて息の合った挨拶を交換すると、ホーギーはにやりと笑う。

「ぬかしやがれ　お、そいつかい、LAに颯爽と登場したサムライ・ヒーローは？」

ホーギーが視線をこちらに移した。私は　当時の生意気な私は、彼の俳優のような様になる笑みに対して、むつつりと仏頂面を返した。ヘッドロックがまだ効いていたのと、日本人「サムライ」という古臭い言い回しが気に入らなかったのだ。

なにより、私は予習によって彼の名を心に刻み付けていた。リーグは違えどロサンゼルスにあるもう一つの球団、フリバスターズの不動のリード・オフ・マン。ランドレル・エイドリアン・ホーグ。彼に仕事をさせないことは私の仕事であり、勝つための条件の一つだった。そう思っていた私にとって、彼は敵以外の何者でもなかった。当時の私は、試合前に敵と馴れ合うつもりはかけらもないなどと、本気で思っていたのだ。

ジョニーは再び私の肩に手を回した。今度は親愛と信頼を感じさせる程度の強さで。

「おおよ、まあ楽しみにしてな。リッキイ坊や、こいつは、」

「ミスター・ランドレル・エイドリアン・ホーグだろ？」私はジョ

ニーを遮って彼のフルネームを口にした。「初めまして。リツキ・イバです」

私のお辞儀に、ホーギーは手を振って陽気に笑った。ハリウッドスターのような、お金を取れるレベルのぴかぴかのスマイルだ。

「よしてくれ。ミスターなんて、堅苦しい。よろしくな、リツキ。俺のことはホーギーって呼んでくれ」

ホーギーが差し出した握手の手を、私は無視した。いきなりのリツキ呼ばわりが気に入らなかつたのだが、自己紹介を済ませていないのだから仕方がない。そう自分に言い聞かせ、口元だけは笑顔を作った。笑顔はプライスレス。当時の私はプライスレスにはあまり心血を注がない主義だった。

「じゃあ、私のことはリツキ、あるいはイバで。ホーギー」

馴れ合うつもりがないことを私はアピールしたつもりだったのだが、そんな挑発的な態度を取る若造にも、彼は動じなかつた。彼もジョニーと同じく、数字も人間性も超一流の器の持ち主だったのだ。ホーギーはすぐに手を引つ込めるとおどけたように肩をすくめ、「ちなみに、カーマイケルじゃないぜ、チーズステーキの方だ」

「？」
なんの話かと首をかしげていると、ジョニーが突然吹き出した。こみ上げる笑いを必死で堪えながら彼は、

「ホーギー、そいつはリツキ坊やには通じないと思うぜ？ ここは西海岸だしな」

「マジか？ どんなつつけんどんな奴も大抵はこれで笑ってくれるんだがなあ。道理でこっち生まれの連中にはあんまり通じないわけだ」

「それもあるけど、リツキ坊やは日本人だからな」

そうしてしばらくの間、私には分からない類の冗談を言い合っては、二人で笑っていた。後になって分かったことだが、彼らは同じ大学のチームメイトだったのだ。彼らの英語は早口で聞き取りづらかったが、暗に私のぴりぴりとした敵意むき出しの態度をあてこす

られていることに私は気付いていた。

一頻りアメリカンジョークの応酬を済ませた後、ジョニーは息も絶え絶えに、

「ま、許してやってくれ、オールデイズ・ホーギー。こいつはお前さんのことを抜かりなく調べてるみたいでな。気が立ってるんだよなっ！」

胸を強く叩かれ、私はむせた。抜かりなく調べ上げているのは確かだが、気が立っているという表現は少し違う、という反論ができる状況ではなかった。実際に立っていたのだから。それでも私は頭の中で、

（見てろよ、試合でそのにやついた表情を消してやるからな）

そう鼻を鳴らすにとどめた。自尊心ばかり大きくなって、自意識ばかり過剰に反応しているサムライ・ヒーローにはそれが関の山だったのだ。

ホーギーはそんな私の内心を的確に読み取っていた。例によってぴかぴかの笑顔を見せ、

「そりゃジョニー、見込みがある証拠さ。良い目つきをしてやがるじゃ、試合でな」

良い試合をしよう、と手を振って去っていくホーギーの背中を見つめながら、私は頭の中で先ほどの彼らの早口の応酬のどこに笑いどころがあったのかを探してみた。もちろん、見つかるわけもなかった。今はどうか？ もちろん理解している。あの時に知っていたら、私と彼の初対面はもう少し違った展開になったのかもしれない。「なんだよ、そんな難しい顔しちまって？」

にやにやと私の顔を覗き込むジョニーに、私は頭の上の疑問符と彼らの会話に入っただけでいけなかった自分に対するほんの少しの苛立ちを、溜息で誤魔化した。

「なんでもない……で？」

「で、って？」

「なにせ俺たちは皆、の続きだよ」

ああ、とジョニーは離れ際に私の頭を軽く叩き、こう言った。「お前さんが思っているよりもずっと、お前さんを信用してるのさ、相棒」

バッカニアーズとフリバスターズのフリーウェイシリーズ（同じロサンゼルスに本拠を置くこの二チームの対決をこう呼ぶのだ）は定刻通りに開始された。

我々の先発はエース、ジョニー。相棒はもちろん私だ。ローテーション上、ジョニーと投げあうのはほとんどの場合、相手のチームのエースであることが多いが、この年のフリバスターズの投手陣は軒並み崩壊しており、誰が相手でも五十歩百歩だった。一方的な試合展開を私は想定していたのだが、この日のジョニーの調子は、はっきり言って最悪だった。

つたく、試合前にリラックスが過ぎたんじゃないのか、相棒。四回が終わったところで三対三。毎回のように走者を出しては、どうにかバックの好守に支えられている状態。球数は既に九十を数えようかというところで、普段の彼からは考えられないことに、奪った三振の数よりも与えた四球の数の方が上回るほどだった。

制球が定まらない投手には、どんなリードも効果がない。今も昔も、コントロールが投手の生命線であることは変わらない。だが、全ての登板でコントロールが定まるなんてこともありえない。誰にでも調子の悪いときは訪れる。それをどう切り抜けるかが問題なのだ。

散っていった野手陣がボールを回している最中、私はマウンドに足を運んだ。

「ジョニー、どこか痛むのか？ まったく球が来ちゃいないぜ」「坊やに説教されるほど、落ちぶれちゃいないつもりだけだな」私の言葉にむっとした表情を見ると、ジョニーはくるくると腕を回し始めた。「別に痛んでるわけじゃねえよ。ただ、今日はスライダーがうまくねえ。避けてもらえると助かる」

「聞いておくよ、相棒」

私はとりあえず頷いておいた。確かに彼のスライダーはほとんど要求した通りに来なかったからだ。ただ、スライダーだけではなく、全ての持ち球が要求した通りには来なかった。特にスライダーが悪かっただけの話だ。

だが、私にとってそれはさほど大きな意味を持つことではなかった。それならそれで仕方がない。ジョニー自身がゲーム中に徐々に修正していくしかなく、できなければ、彼はノックアウトされてベンチに引っ込むしかない。

そのことを彼もよく分かっていた。見たこともないような弱気で自嘲的な笑みを浮かべたのだ。

「ふう……悪いな。半分も思ったところに行かないんじゃない、リードにならねえだろ」

「らしくないな。坊やに説教されるほど、落ちぶれちゃいないんだろ？」

「信用してるのさ。予習は完璧だよ。ただ、俺がその通りに投げれてねえだけだ」

これは重症だな、と私は思った。最速九十五マイルの剛球と制球力を兼ね備えたこの男にとって、実のところの一番の武器は気迫だ。彼の闘志溢れるマウンドさばきがチームに勇気を、相手チームに恐怖を与える。近年まれに見る（私の知る限り彼の野球人生でもっとも悪かったかもしれない）最悪な調子によって、彼はその一番の武器を錆びつかせつつあった。

なんとかかしくなくてはならない。私は消沈しているジョニーを見てそう決意していた。どうすればいいか、いつそ、制球が定まらないことを開き直らせるか。私はその方法を必死で考えた。

「予習は完璧なつもりだったけどな……もしかしたら」私はグラブで口元で隠して、声を潜めた。「私のリードの通りじゃないから三点ですんでいるのかもしれないぜ」

ぼかんと口を開けたジョニーの軽く肩を叩き、私は駆け足でポジ

シヨンに戻った。今にして思えば決して上等な冗談ではないが、あの時の私にはそれが最上だと思っていた。後にこの日のことを尋ねたとき、ジョニーはすっかりこのことを忘れていた。だが、最上ではないにしろ効果的ではあったと思う。

到着してマスクを被る頃にはジョニーはいつもの頼れる兄貴分の表情に戻っていた。切り替えの早さは彼の美点の一つだ。それでいい。投手は強気を、慎重さは捕手が持つていなければならない。弱気は投手にとって害悪でしかない。そう思い、私はマスクを被って次に片付けるべき仕事に頭をフル回転させた。

この回だ。

この回の流れ次第で、ジョニーは立ち直りのきっかけをつかめるかもしれない。三人で切る必要性を私は感じていた。

ネクストサークルに立っているのはホーギーだった。五回表、一番から。さあ今から仕切りなおしだ、と気持ちを入れ替えるには十分なシチュエーション。そのために、私はなんとしても彼を三振に打ち取りたかった。

そうは言っても、だ。

左打席に入ったホーギーを私は見つめた。悩みどころは彼の貪欲な出塁への執念だ。ここまでの二度の打席で、私はその執念を誰よりも近くで感じていた。最初の打席も二度目の打席もアウトにこそしたが十球以上粘られた。カウントが整うまで、好球がやってくるまで慎重にボールを待ち続け球筋を見極める姿は、ビデオで学んではいたが、さすが理想のリード・オフ・マンといわれるだけのことはある。そして彼ほどの選手なら、すでにジョニーの調子は看破されていると見るべきだった。

せめて一個でも軸になる球があればな。

全ての球種でストライクとボールがはつきりしてしまっている今日のジョニーで、どうやってこのうるさい打者をアウトに取るか。初球の入りを悩んでいると、ホーギーと目が合った。その瞳に映った、獲物を前にした肉食獣にも似た輝きに私は戦慄した。

くそ、迷うな。弱みを見せるな。

弱気を振り払ってサインを出し、ジョニーは大きく頷く。既に彼の瞳は力強さを取り戻していた。そう、ジョニーはしっかり切り替えてみせた。私がひよっていてどうするのだ。

セットに入り、一球目。ボールが放たれた瞬間、ホーギーはバントの構えを取る。

っ、そうきたか。

球威を吸収する乾いた木の音とともに、三塁線に転がったボールは切れるか切れないかという絶妙な位置に転がった。三塁手か、投手か、捕手か、それぞれの守備範囲においてもギリギリの好位置にラインを割るか、割らないか、我々の一瞬の躊躇を尻目に、ボールは三塁手のグラブに収まり、

「投げるな！」

私の声に送球体制で三塁手が止まった。すでにホーギーは一塁を駆け抜けていた。見事すぎるセーフティバント。

初球から……コントロールが定まらない投手相手に？ やっ
てくれるな。いいや、だからこそ、かな……。

織り込むべき事態だった。自分の軽率さに歯噛みしている私と、塁上に戻るうとするホーギーと再び目が合う。その目は「まだ終わりじゃないぜ」というふてぶてしい輝きを放っていた。

私は放り投げたマスクを拾い、気を引き締めた。そう、終わりではない。ホーギーが一塁にいるとき、そのときこそ、私と彼の本当の意味での勝負が始まるのだから。

「それでそれで？」

前のベンチから身を乗り出してくるエリーシャ・ナッツ、ドラフトされてからマイナーで半年ほど過ごしただけでこの世界に足を踏み入れたスーパースター、に視界を遮られ、私は大きく溜息をついた。オールスター（私も彼女も惜しくも選出されていない）を直前に控えた、彼女の前半戦最後の登板は明日に予定されているので、

この日は出番がない。暇なのは分かるが、私は試合に出ているのだから暇ではないのだ。もつとも、十二対〇で敗色濃厚な九回裏ツアウトランナーなしなのだが。

後年、出番のないベンチ入りの日にこうして私にお話をせがむのがエリーシャのルーチンパターンになったのは、おそらくこの日に端を発している。

「話してやるから、どいてくれないか？　試合が見えないだろ」

「はいはい」

「そんな返事の仕方を君のママは教えたのか？」

「はい」

うきうきと隣にやってくるエリーシャに、私はこれ見よがしに溜息をついた。無条件に子供のような仕草で懐かれることに当時の私は頭を悩ませていた。彼女は一級の投手であり、一級の美少女である。私は試合中にあまり妙な気を起こしたくなかった。

誤解のないように言っておくが、別に彼女に対して何か変な気を起こすことはない。彼女は私の恋人、メリリー・ナッツが作り上げた一級のロボット投手だからだ。ただ、生みの親と瓜二つのその外見から、私はその先にいる彼女の存在を意識せざるを得ないというだけで。そして、メリリーは天才ロボット工学者として非常に多忙な毎日を送っているの、滅多に会うことが出来ない。そのことを寂しく思うことは断じてなかったが、時折無性に会いたくなることもあった。当時の私はまだ若かったのだ。

私のメジャー生活もそれほど浮き沈みもなく（三年目に大きな不振はあったが、終わってみればそれほど悪い年でもなかった）、五年目を迎えていた。

あの二年目のシーズン以降、バッカニアーズは低迷を続けていて、その理由の一つは、ジョニーをチームに引き止めるための多額の年俸がチームの補強の妨げになっていることなのは誰の目にも明らかだった。ジョニー自身はそれほど年俸に拘泥するタイプの男ではないが、かといって他の全ての選手がそういうわけでもない。ぜいた

く税をフロントが恐れるのは（一部の金満オーナーを除けば）どこでも変わらない。ジョニー一人を残すか、他の優秀な打者を数人残すか。ウチの場合はまずは前者をとっただけだった。

そうして慣れ親しんだチームを離れるものはMLBでは珍しくない。そしてそれは、誰の身にも降りかかる。例えば、オールデイズ・ホーギーであろうとも。

「あの日のジョニーは最悪の調子だったが、あの回で立ち直るきっかけはつかめると私は思っていたんだ。そこに、」

「初球セーフティ！ うーん、私も明日は気をつけなくっちゃ」
腕を組んでフィールドを眺めるエリーシャ。その視線は守備に
いているシアトル・トライトンズのセンター方向、中堅手の位置に
いるホーギーに注がれている。

彼は昨年からトレードでトライトンズに移籍していた。トライト
ンズは不幸にも、これはあくまで私にとつてだが、バッカニアーズ
と同じア・リーグの上と同じ西地区である。

そしてこの日も私はホーギーを止めることは出来なかった。あの
日のように。いや、違う。あの日からずっとだ。

「ホーギーは塁上では誰よりも警戒が必要な相手なんだ」

「いつも盗塁を狙ってるから？」

「ああ。盗塁をさせまいと考えると、どうしても配球が狭まる。ジ
ョニーみたいにセットから投げるタイプならあまり影響はないが、
普段ウィンドアップな君みたいなタイプは、セットでクイックとな
ると球威も落ちる」

「盗塁されても気にしなけばいいんじゃないの？ 次を抑えれば
一緒でしょ？」

「それはそうなんだが……」私は苦笑した。エリーシャは色々と一
級だが、まだまだ野球脳が二級だ。ただ盗塁が得意というだけなら
どれだけ楽なことか。「あの時の試合みたいに、こういう場面でや
られたら嫌だ、っていうタイミングで確実に盗塁を決めるんだよ」

「？ どういうこと？」

疑問符だらけの表情で顔を寄せるエリーシャに、私は言いよんだ。顔が近づきすぎているのが理由の一つ、もう一つが、「上手く説明できない。実際にやられてからでないかと分からないことも多くてね」

こればかりは体験してもらうしかない。野球というゲームにおいて、『流れ』という言葉だけで片付いてしまう場面が多々あるのは周知のことだが、当事者にとってそれが分かるのは大抵全てが終わった後のことなのだ。

私の言葉に彼女はふーむと首を捻った。

「実際にやられたの？ その時も」

ああ、やられたともさ。

あの時も、そして今日の試合でも、流れを決定付ける盗塁を決められた。私は先ほどから、知らず拳を握り締めていたことに気付いた。

「……リッキイ？」

心配そうに私の頬に手を伸ばすエリーシャを遮り、私は立ち上がった。ゲームセットが告げられたからだ。気持ちを新たにする必要があった。二重の意味で、今度こそ、と。

「リツキ、あるいはイバだ、エリーシャ」

盗塁という行為がもたらす効果について、ここで皆さんに説明しておく必要があるだろう。正直な話、ただの盗塁自体にはそう大きな効果があるわけではない。それは大量リードしているチームが盗塁を行っても数に計上されないことから分かる。足の速い奴がただ次の塁を陥れるだけの行為は、さほど意味を成さないのだ。

よって、数だけに目を向けることは非常に危険だ。単なるシーズン五十盗塁よりも恐れるべきは、試合の流れを引き寄せる二十盗塁の方。そちらの方が私たち捕手にとってよっぽど厄介な相手である。もちろん、試合の流れを引き寄せる五十盗塁はもつと最悪。

それをやってのけるのがオールデイズ・ホーギーだ。

あの初球セーフティの後、彼は見事な盗塁を決めて見せた。

今でも鮮明に思い出せる。私のサインに頷くジョニー。いつも以上にランナーをちらちら窺うジョニー。足を上げるのと全く同じ、むしる速いくらいのタイミングでスタートを切ったホーギー。そうなることを予測して外に外させ、万全な送球態勢を得た私。その後の私の無様な送球。

そのままずるとジョニーは失点を重ね、結局六回六失点で敗戦投手。立ち直れたかもしれないタイミングで、そうはさせまいという嫌な盗塁だった。

次の試合でも、その次の試合でも、そしてこの日の試合でも、すべての試合で、出塁するたびに彼は必ず試合の流れを決める盗塁を決めてきた。私たちバッカニアーズ戦では特に強かった。とにかく勝負どころの嗅覚が優れているのだ。

その上、一度も失敗はなし。

腹立たしいことに、彼が盗塁を失敗するのはなぜか私がマスクをかぶっていない相手のときだけだった。他チームのときという意味ではない。同じバッカニアーズが相手でも、私が休養をもらって控え捕手が出場しているときは何度か失敗することがある。

つまり、ホーギーに成功率100%を許しているのは、MLBの主要な現役捕手の中では私だけなのだ。MLBの主要な現役捕手の中では盗塁阻止率トップを記録しているのに。対戦カードの少なかった頃ならともかく、この時点では同地区同リーグ。それは致命的とも言えるバッカニアーズの急所であり、あらゆる意味で、私にとって彼は天敵だった。

そんな天敵の封じ方を何とかして見つけなくては、という義務感から、当時の私の就寝前の日課はいつもホーギーのフィルムを見ることだった。自分の敗北する瞬間を繰り返し繰り返し見つめるのは、はつきり言って楽しい作業とはいえない。

画面は、巧みな牽制術と投球術を誇るチーム二番手の軟投派エース、ケルヴィン・モイヤーが見事に盗塁されているところを写して

いた。ついさっきの試合の分だ。

フィルムと私の記憶からの映像が合致していく。ホーギーの完璧なスタート、私の完璧な送球、それでも悠々とスライディングから立ち上がるホーギーの姿。もちろんセーフだったし、その直後に彼は先制点のホームを踏むことになる。そこからモイヤーは一挙八得点を許してマウンドを降りる羽目になった。完全にあの盗塁でリズムを狂わされてしまったのだ。

そこまではもちろん見る必要がない（見れない、見たくない）ので、歯噛みしつつ私は巻き戻した。再び盗塁直前。私のサインに頷き、ランナーを見つめるモイヤー。セットポジションで数秒間ランナーに睨みを利かせ、足が上がる。その瞬間には、ホーギーは既にトップスピードへと加速。完璧すぎるスタート。セーフ。巻き戻し。もう一度。もう一度。もう一度。

「くそっ！」

私はリモコンを放り投げ、天を仰いだ。物に当たるとは情けないにも程があるが、自分の鬱屈した感情のぶつけどころはそこにしかなかった。

盗塁の成否のほとんどはスタートにかかっている。彼がバツカニアーズの投手陣のくせを完全に見抜いているというなら、私以外の捕手が刺せることの説明がつかない。事実、彼が盗塁死するのは、そのスタートでほんの一瞬のミスをするときだ。

私のときだけそれが絶対でない。私がマスクをかぶっているときだけは、ホーギーは完全に私の相棒たちのモーションを盗んでいる。だから私にだけは彼を刺せないのだ。

それが一体何故なのか。なぜ、私のときにだけ？ 私にはどうしても分からなかった。分からなくて、そしてそれが悔しくて仕方なかった。立派な成人男子にあるまじきことだが、声をあげて泣いてしまいたいほど悔しかった。

だからインターフォンが鳴ったとき、私はしばらく反応できなかった。こんな情けない姿を誰かに晒すのは気がひけたのだ。そもそ

も、人を訪ねるにとしては時間が遅すぎる。時計を見やると、まもなく日付が変わるところだった。

再びリズムを刻むように数回インターフォンが鳴り、私のイラつきは頂点に達した。どこの誰だか知らないが運が悪いにも程がある。私はジョニー直伝の悪態を、その不幸な訪問者に聞かせてやるうと心に決めた。彼ほどの迫力は望むべくもないが、私にだってその三分の一度は相手を威圧することが出来るはずだ。

大股でドアに向かい、チェーンを外し、乱暴にドアを開け、

「ヘイ、どこの誰か知らないが今すぐ消え失せねえとケツからミルクが飲めるようになるまでこの世のクソ地獄を」

言い終わることができず、私は固まった。不幸なのは訪問者ではなく、私のほうだった。

「それって具体的にどんなことするのかしら、リツキィ？」

につこりと笑った訪問者。そしてその背中から、全く同じ顔をした女がひよつこりと顔を出す。エリーシャ・ナッツ。明日の私の相棒。

訪問者の名はメリリー・ナッツ。エリーシャの生みの親、そして私の恋人だった。

「酷い有様」

部屋をぐるりと見回すなりメリリーはそう言った。名誉のために補足しておくが、私の部屋は決して散らかってはいなかった。ただ、フレームの薄い銀縁眼鏡の奥、視線の先には私が先ほど破壊したりモコンの残骸があった。エリーシャがそれを拾い、首を捻りながら元どりに直した。プラスチックが多少割れて、電池が飛び出した程度だったらしい。

「送球の練習をしたもんで」

肩をすくめた私に、メリリーが呆れたように首を振った。

「あなたが、よ」

「寝ていたところだったんだ。寝相の悪いのは知ってるだろ？」

「そういうの、確信犯だわ」

私は彼女から目を逸らして無言でソファを勧めた。が、既にエリーシャが横になっていて、私たちの座るところはなかった。一体いつの間に……私は足をパタパタ動かしながらリモコンを操作しているエリーシャを睨んだ。

「行儀が悪いな、エリーシャ。ここは誰の部屋だ？」

「これ、今日の試合？」

私は答えなかった。彼女もあの場にいたのだから見れば分かることだ。ビデオを流しっぱなしで眠ってしまった、という状況を私は演出できただろうか、そればかりが気がかりだった。今にして思えば、悔しさに任せて物に八つ当たりしたにしろ、夢にまで今日の敗北を持ち込んで大層な寝相を披露したにしろ、メリリーの言うとおり、私自身が酷い有様には変わらない。ただ、自分の敗北に打ちひしがれて泣いていると思われるのだけは嫌だった。

とにかくコーヒーでも入れよう、と私はキッチンへ向かおうとしたが、メリリーはそれを制し、

「お守りしてて。行儀の悪いウチの子の」

そう言っつて、勝手知ったる様子でキッチンへ向かった。断固とした口調に逆らえず、手持ち無沙汰になってしまった私は、仕方なくエリーシャの足を叩いて座るスペースを空けさせた。

「君たち、こんな時間に何しに来たんだ？」

「ちよつと集中してるの。黙ってて」

膝を抱えたままソファに寝転がっているエリーシャはじつとビデオを見つめていた。とても集中しているようには見えないが、私がしていたのと同じように、延々とホーギーの盗墨シーンを繰り返しているようだった。

私は行儀を躰けることを諦めて、一緒に見ることにした。

最初のうちは事前から事後までを通して見ていたが、回数を重ねるうちに徐々に盗墨の寸前のみを何度も繰り返すようになった。スタートを切る瞬間、モイヤーが足を上げる瞬間、その前の両者がに

らみ合う瞬間、さらに前のサイン交換の瞬間。巻き戻し、繰り返し。
どれくらい時間が経ったか、やがてエリーシャはテレビを消し、
「オーケイ。もう大丈夫」

そう言っただけで起き上がると　突然、勢いよく私に抱きついた。女
の子らしい、というよりも女性らしい、さらに言えば恋人と同等の
柔らかさに、私は驚きを通り越して、一瞬気を失いかけた。我に返
ったときの私のポーズはまさに、『お手上げ』だった。

「……いきなり不意打ちだな」

「うん、おやすみの挨拶。帰るね、リツキ」

「リツキ、あるいはイバ」

「調子出てきたじゃない、そうこなくっちゃ」

私たちはそれぞれ二度、背中を叩き合っただけで離れた。エリーシャは
一度キッチンに向かってメリリーに先に帰る旨を伝えると、振り返
ることなく私の部屋を出て行った。

実を言うと、調子が出てきたところか、私は内心で大いに慌てて
いた。ぶつかるような勢いで行われた『おやすみの挨拶』に対して
もそうだし、そうしてできあがってしまった私の部屋にメリリーと
二人きりの状況、予測不能の自体だ。お手上げだ。どうしてこうな
った。いつだってエリーシャ・ナッツは予測不能な行動を取り、私
はそれに振り回されるのだ。

しばらくして、メリリーはマグカップを二つ持って私の隣に座っ
た。随分と時間をかけたものだと思っていたら、どうやらしっかりと
と豆を挽くところから作ったらしい。受け取ったカップからは、普
段嗅ぎ慣れない本物のコーヒーの香りがした。

「エリーシャがね」メリリーは私に少し身体を傾けた。「今日は絶
対に時間を作ってリツキに会ってくれって」

日ごろ忙しく研究に没頭しているメリリーは、時折メンテナンス
のためにロサンゼルスへやってきてエリーシャの身体をチェックす
ることになっている。今日はおそらくその日だったのだろう。それ
以外で彼女と会えるタイミングはそう多くない。そのタイミングで

あつても会えることはそう多くない。それだけエリーシャには金と手間がかかっているのだ。

「それで気を遣って帰ったわけ？」

「どうしても確認しておきたいことがあるから、それが済んだらお邪魔虫は消え去るのみ』だそうよ」

「確認しておきたいこと？」

私は首をかしげた。先ほどまで見ていた今日のビデオのことが。生まれて数年のロボットが生みの親とその恋人に対して気を遣ったという事実も驚きだが、それ以上に悩ましい話だった。確認とは一体なんの話か。

エリーシャが何度も繰り返し見ていたのは、ホーギーのスタートの瞬間だ。つまりは彼の対策ということになるのだろう。それは分かる。ではなぜ、私になにも相談しなかった？ 彼女は自分一人で一体なにを確認したのだ。一体なにが、オーケイ、もう大丈夫なのか

悶々とした心を鎮めるために、私は一口コーヒーをすすった。

驚いた。美味い。

「オーケイ、もう大丈夫、みたいね」私の顔を覗き込んで、メリリはにっこりと笑った。「腕を振るった甲斐はあつたかしら」

初めて出会ってから二年。お互いにお互いの存在が大事と確信したのは今年。彼女がコーヒーを煎れることにかけて、振るう甲斐のある腕を持っていたことを、私は初めて知った。いつだって、いくつになつても、大事な人の新しい一面は驚きとともに歓喜をくれる。それは天敵との対決を前にして己の無力さに打ちひしがれていた私にとって、相棒の不可思議な行動に不信感を抱きつつあった私にとっては、重要な瞬間だった。

私は思わず笑った。とても爽やかな気分だった。

「意外な特技だ」

「徹夜が多くなるからね。自然と上手くなったの」

「それじゃあ眠れなくなりそうだな」

「馬鹿。でも、リラックスできたでしょう？」

私は頷いた。カフェインの効能に関してはともかく、少なくとも私をリラックスさせる効果はあった。どちらにしたって、メリリーたちが訪ねてこなかったとしても私は眠ることは出来なかっただろう。荒んだ気持ちで眠りにつけないよりは幾分マシかもしれない。

確かに、とりあえず　　オーケイ、もう大丈夫だ。

私の反応に気を良くしたのか、メリリーはさらに私に身体を傾けた。私は少し迷ったが、彼女の肩に手を回した。徐々に感じる恋人の感触。擬似的な同等の感触ならちよくちよく感じるしさつきも感じたが、やっぱり決定的に色々違う。あつちは邪気がなさ過ぎる。私の邪な衝動の入る余地がないくらいに。

しばらくの間、私のコーヒーをすする音以外、静かな二人の時間が続いた。そして、私が飲み終えたころ、

「ねえ、リツキィ？」

「なんだい、メリリー？」

彼女は眼鏡を外してこちらを見た。澄んだ緑色の瞳が細められる。近視の人間がよくやる目つきだ。私はしばらくの間、食い入るようにそれを見つめた。やがて彼女は、

「あなたの顔がよく見えないから、もう少し近づけてもらってもいい？」

「……確信犯だね」

私は彼女の要求に従った。いつも要求する側なのだからたまには良いだろう。どうしたって眠るまではもう少し時間が必要なのだから。

その翌日の試合、先発のエリーシャは好調なピッチングをみせた。滑り出しの一回から三者三振（もちろんこれにはホーギーも含まれる）、ヒットは彼以外による散発四安打、要所を併殺で仕留める省エネ投球であれよあれよと八回までを無失点で抑えていた。

反して打線は最悪の調子で、私のヒットで三塁を陥れようとした

一塁ランナーがライトのレーザービームで捕殺されるといふ不運が二度もあつたこともあり、主砲ハンターの一発で一点を上げるのが精一杯だった。

私は試合の流れが完全には決していないことを感じていた。点差は一点。決して樂觀視できる点差ではない（そもそも野球にはセーフティリードというのには存在しない）。私はもやもやとした嫌な予感を抱えていた。

クローザーであるハストン・ヒューズに繋ぐ継投を考えていた監督は、この日もそうしようとブルペンと連絡を取っていたのだが、八回を投げ終えたエリーシャが続投を志願した。

「ヒューズはオールスターに出るんでしょ。今日くらいは休ませてあげるわよ」

ベンチ全体に広がった口笛と喝采に、私はなんだか何年か前の自分を見ているような気分になった。ジョニーも私を見るときこんな気分だったのだろうか。いや、断じてここまで生意気ではなかったと思うが、ともかくも監督は彼女の要求を受け入れ、

「ありがと。大好きよ、ボス」

ベンチを悩殺するような一言を残し、果たして彼女は九回のマウンドに立った。

大口を叩くだけのことはあつて、エリーシャは疲れを感じさせない見事な投球で八、九番をあっという間に打ち取った。それでも、あと一人というところになつても、私にはどうにも嫌な予感が消えなかった。天敵のことが頭をちらついていたからだ。

こういう場面で回ってくるんだからな。持つてるといふか、役者というか……

打順は一番のホーギーに戻った。点差は一点。今日のエリーシャの調子なら抑えることはそう難しくないはずだった。抑えればそれで勝ちだ。確率四割の出塁は六割の失敗を意味しているんだと自分に言い聞かせた。

だが、嫌な予感は杞憂ではなかった。

「ボール」

フルカウントまで粘られた末の十一球目、アウトローギリギリを狙った彼女のツーシームは、審判にそうコールされてしまった。

「おいおい」

キャッチした私にはそれが審判の誤審だと分かっていた。マスクを外し、振り返って審判を睨んだものの、審判は表情を変えずにもう一度、ボールだ、と呟いた。引っ込みがつかないのだ。すでにコールされてしまった判定を覆すのは不可能だと私には分かっていた。それでもこのただ一球の誤審が試合の流れを決め兼ねない大事な判定であることは間違いがなく、私は抗議しないわけにはいかなかった。

なにせ私の天敵、ホーギーが塁に出てしまったのだ。繰り返すが点差は一点。ホーギーは同点のランナーになる。そして彼はほぼ確実にスコアリングポジションに進んでしまう。捕手が私だからだ。なにがなんでも塁に出ようとするホーギーの執念は審判すら味方につけてしまったという事実には、私はかなり泡を食っていた。

「今のがボールだって言うのか？ あんた一体、」

どこに目をつけているんだ 食って掛かるうとする私の背中が引っ張られ、口元を手でふさがれた。

「らしくないよ、リッキー。冷静に、冷静に。今のは私から見てもボールだって。ね？」

エリーシャの声で私はいくらか冷静さを取り戻した。そして自分が今、退場を宣告されかねないヤバイ状況にあったことに愕然とした。一体、私はなにをやっているのだ

既にフォアボールの判定に従ってホーギーは一塁に立っていた。私はエリーシャに手を引かれてマウンドまで連れて行かれた。その間にベンチから出てきた監督が、審判と話を始めていた。講義を許されているのは監督だけだ。

マウンドに到着したエリーシャはぶんむくれて私の鼻を指ではじいた。

「あつぶないなあ、しつかりしてよ、相棒。退場にでもなつたらどうするつもり？」

「……すまない」

口ではそう言いつつも、そうなつたら少なくともこの試合では我々に優位かもしれない、と私は自虐的に思った。少なくとも、ホーギーは私がマスクを被っていないときは完璧なスタートを切る事ができない。エリーシャはクイックも牽制もそれほど際立って上手いわけではないが、それでも私と組むよりはマシなのは

「……ッ」

今度はクラブで鼻を弾かれて、思わず一瞬だけ目を瞑った。目を開くと、エリーシャの目つきはさらに険しくなっていた。

「馬鹿なこと考えてるでしょ。そんなにあのオールデイズ・ホーギーが怖いのか？」

私は息を呑んだ。それは認めることのできない感情だった。敵対心ではなく、恐怖。だがそれは認めざるを得ない事実でもあった。初めて会ったあの日以来、私は彼に対して特別な負の感情を持っているのだと。度重なる盗塁によって、私はそれをより強くし、自分の中でさらに彼を強大な敵に仕立て上げているのだということ。

私は認めた。ただし、今の状況における恐怖感を。

「怖いね。なにせ同点のランナーだ。ツアアウトだろうが彼は狙ってくる。私が相手なら百パーセント成功させられるからだ。スコアリングポジションまで到達したら危ない。二番と三番には今日二本ずつ打たれてる。怖くないわけがないだろ」

私の言葉に、エリーシャはフンと鼻を鳴らした。それがどうしたと言わんばかりに。その傲岸不遜な態度に、昨日彼女が口にした言葉を私は思い出していた。

「盗塁されても気にしなればいいんじゃないの？ 次を抑えれば一緒でしょ？」

だが、彼女が口にした言葉は、全く予想もしなかった言葉だった。「絶対に走らせない」

「……なんだって？」

「走らせない。絶対に私が走らせたりしない。私を信じて」

メリリーと同じ緑色の瞳が、私を射抜くように見つめた。力強い言葉を体現するような、緊張感のあるその瞳。目は口ほどにものを言う。それはメリリーには決して出来ない、マウンドにいる私の相棒たちだけが出来る、断固とした決意の瞳だった。

そんな投手の決意に水を差せるような男なら、私はあの世界で捕手を続けられはしなかっただろう。エリーシャは昨晚何かを掴んだ。ホーギーの盗塁を防ぐために何かの目星があつて、そしてそれを確認するために私の部屋に来た。それを確認できた彼女が私になにも言わなかったのは、おそらくそれを知ったところで私にはどうにもできない「なにか」だからだ。それでも、彼女はその確認した「なにか」にはつきりと自信を持っている。

私は腹を括った。彼女を信じるべきなのだ。自分の中にある、ホーギーに対する恐怖よりも。

『オーケイ、もう大丈夫』

私は昨晚、二人が私の部屋で言った言葉を口にしていて。自分でも無意識のうちで、しかもそれはどうやら日本語で口にしていたようだった。

「ん、なにか言った？」

聞き取れなくても無理はないだろう。エリーシャが怪訝な顔でこちらを見たので、私は彼女の鼻の頭を指でつついた。

「なんでもない。そこまで言うんだからな。信じるよ……相棒」

「あまり信頼されているように感じないなあ」

鼻の頭を押さえながら、エリーシャは不満そうに頬を膨らませた。「信頼の証だよ」私はマスクを被った。既に頭は冷静さを取り戻していた。「今のでさつきリッキイと呼んだことはチャラにしてやる。二番、三番は歩かせてもいい。アウトカウント一個取るのに三人も使えるんだ。君なら余裕だろ？」

「うん。やっと調子出てきたね」

私たちは拳をつき合わせた。もう私は一塁を見ることはしなかった。

「あの時、そんな話をしてたのか。面白えな」

感慨深そうに頷いているホーギーに私は苦笑した。ベンチでこうして誰かと話をしているのは、捕手である私にとって少なくともいとだが、まさかその相手が彼になることがあるなんて、世の中というのはなにが起こるか予測もつかない。

彼と初めて会ったときから八年。私の十一年目のシーズン開幕戦。二回表のバツカニアーズ守備中の出来事だった。私とオールデイズ・ホーギーの天敵関係、あくまで一方的な私の敵視だが、は既に終焉を迎えていた。彼のことを敵とは思えなくなっていたのだ。なぜならば、

「チームメイトになったから、もうバラしてしまってもいいと思っ
てね」

私たちは歳をとった。ホーギーは代走選手、あるいは、第四の外野手として、バツカニアーズと一年契約を結んでいた。彼の年齢は既に四十を間近にしており、既にスタメンを約束された立場ではなくなっていた。いや、誰だってこの世界で試合に出ることを約束されていることなんてない。実力の世界だから。それは私だっただけだ。怪我をしたのなら尚のこと。

この年の私はスプリングキャンプ中に右ひざを痛め、この日はチームドクターから休養を命じられていた。故障者リスト入りする必要のない軽度のもので、痛み止めとテーピングさえ済ませれば試合に出ることは不可能ではなかった。許されるならば、今すぐにも私はあのコーナーストーンを守りに行きたいところだった。控え捕手であるジョナサン・ブキャンは、まだまだインサイドワークに課題を残している。私の存在を差し引いて考えても、スタメンを張るべきではない。

だが、ドクターは許してくれなかった。捕手というポジションと

年齢を加味したのと、シーズンはまだ始まったところで、今は無理すべき時期ではないというのがその理由だった。

「おっと」

ホーギーが顔をしかめたので、私はフィールドに視線を戻した。高く舞い上がった白球がレフトの頭を越えてフェンスに直撃するところで、私は思わず舌打ちした。目の前で炎上し始めている投手を見るのは、見ていることしかできないのは、かなりストレスが溜まることだ。

「で、だ」ホーギーは茶目つ気たつぷりに片目を瞑った。「あの場面について、もうちょっと聞きたいところだな」

「今の場面も気にすべきだと思うが」

「お互い、今の場面に対してしてやれることはなにもねえだろ？」

そりゃそうだ。私は頷いた。がんばれ、ブキャン。ここでアピールしなければ、私はまだまだお前さんを控えに追いやらなければならぬぞ。お前のリードで凌いで見せる。

「あんたも私も、あるかもしれない今日の出番に備えておくべきじゃないか？」

「備えてるさ、今まさに。知っておく必要があるんだよ。どうしても分らないんだ。あの時の俺が何をミスしたのか、どうして俺があの子に牽制で刺されることになったのか。先を聞かせてくれよ」

あの子、という単語は、エリーシャがこの場に行かないことに対する、ホーギーなりに気を遣った言葉だった。その気遣いが逆に私の胸に痛みを思い出させたが、それを口にするほど私は愚かではないし、そもそもそれは全く別の話である。私は表情を変えずに言った。「あんたはミスなんかしちやいなかった。私があんたの盗塁を刺せなかったのが、私の責任ではなかったらしいってことと同じにな」

「……知ってたのか」

少し驚いたように、ホーギーは目を見張った。この反応を見るまでは、私は半信半疑だったのだが、いよいよ確信した。エリーシャの見つけた「なにか」は的を得ていたのだ。

「いや、それについても私は逆に聞きたいね。それが本当なのかどうか。どうだ、ホーギー。一つ、答え合わせといこうじゃないか」

九回表二死一塁、一対〇でランナーはあのオールデイズ・ホーギー。私にとつて生涯忘れることのできない試合、私がマスクを被っている試合で初めて、いや唯一ホーギーが盗塁を失敗した試合の終焉は、実にあつけないものだった。

長い抗議の時間が終わり（もちろんそれは私をかばうための監督のポーズなのだが）、私がマスクを被って位置につき、審判がプレイを宣告してから試合の終了をコールするまで、ほとんど時間はかかっていない。打者に対しても、一球も投げていない。なぜなら、エリーシャがホーギーを牽制で刺したからだ。

思い出せる限り状況を説明しよう。私は盗塁に備えて外角高めにボールになるファストボールを要求したが、エリーシャはあっさりと首を振った。今にして思えばこの情けないリードには首を振ってしかるべきだと私も思うが、あの時の私は、

冗談じゃない、ここで走られることの怖さが分かってないのか？

内心で自分の要求に従わないエリーシャを駄々っ子のように扱っていた。

私がもう一度同じサインを出すと、彼女は胸を一度強く叩き、次に投手側からのサインでなにを投げたいのかを要求してきた。

馬鹿な……カーブだと？

当たり前の話だが、カーブはファストボールに比べて随分と遅い球だ。私のところに到達するまでにコンマ何秒かの違いがある。そしてそのほんの少しの違いは、盗塁という塁間約三秒コンマ幾らかの出来事において重要な意味を持つ。

この場面で警戒するにこしたことはないんだ。外に外せ。

エリーシャは首を振り、もう一度、さらに強く自分の胸を叩いた。人間だったらむせかねない強さが傍目にも感じられ、私はそこに彼

女の込めているメツセージを強く感じた。

信じる、か。

挑みかかるような姿勢でサインを待つエリーシャ。私はその瞳の力強さに圧倒された。よほど自信があるのだ。私の慎重さが弱気に映ってしまうほど、まあ実際に弱気だったのだがそれは慎重と表裏一体のことだ、彼女は強気だった。まったく、どちらがリードしているのだから分らない。チームも、私も。

「走らせない。絶対に私が走らせたりしない。私を信じて」

頭の中でもう一度エリーシャの言葉を再生し、私はありったけの勇気を振り絞った。

よし、それでいく。カーブだ。

信じると決めたのだから。彼女は私を信じてくれているに違いないと私は思った。このサインに彼女なりの何らかの意図があることを私が読み取ってくれるのだと。私はその信頼に応えなければならぬ。たとえ読み取れていなくても。

私のサインに彼女は力強く頷いた。セットポジション。一塁のホーギーをじっと見つめる。にらみ合うようにしばらくそうしていると、やがて、深呼吸をするように（ロボットである彼女は呼吸をしていないのだが、たまにこういう人間臭い仕草をする）大きく肩を上下させた。そして目を瞑り、黙想するようにしばらくまた静止。そのまま、目を瞑ったまま私の方に顔を向けて

『あ』

私は思わず声に出していた。エリーシャの足が上がったがそれは牽制のため。ほんの一瞬逆を疲れたホーギーは帰塁できずに呆然と一塁手のタッチを受けた。

電光石火のピックオフプレイ。それも目を瞑ったままそれを行ったのだ。

審判のアウトの宣告。他人事のようにそれを聞きながら、私は呆然と立ち上がった。少し遅れて歓声があがり、私は試合が終わったことを徐々に実感した。

こうしてあの試合はエリーシャ・ナッツ初の完封勝利で幕を閉じたのだった。

「全然わからねえな……」ホーギーは難しい顔で腕を組んだ。「あの牽制、お前さんの指示じゃあなかったのか」

「そう思わせることが目的だったけどな。実を言うと、私だって驚いたくらいだ。あんたが帰塁もできない完璧なタイミングで牽制死するなんて」

本当に驚いた。あのタイミングで、ただでさえ得意ではなかった牽制を目を瞑って成功させた、試みたエリーシャに対して。

唸りながら頭を掻くホーギー。

「もったいぶらねえで教えてくれよ、お前さんのことだ。どうしてそうなったか、理由は聞いたんだろ？」

「もちろん」

勝利のハイタッチを終えてベンチで荷物をまとめながら、私はあの驚異的な牽制についてエリーシャに尋ねた。

「ん？ どうして牽制した……って……分からない？」

「分かるわけないだろ。私はそんなサインは出してない」

「えー、サインなくても刺せるタイミングならするのが当然じゃない」

「だから……」

どうしてあれが刺せるタイミングだったんだ。私はそう言おうとしたが、言葉にならなかった。人間、目の前に理解の及ばない出来事が展開されると、言葉にならないものだ。私のように二カ国の言葉で思考すると余計にそうなる。

「言ったじゃない。絶対に私が走らせたりしないって　おいしよシヨルダーバッグを背負ったエリーシャは、こともなげに言い放った。「昨日の夜、ビデオで確認したの。ミスター・ホーグの癖って　どうか、傾向……うーん、傾向って言葉が一番合ってるかなあ」

「傾向だつて？」

ますます意味が分からない。歩き出したエリーシャを追って、私も慌てて荷物を背負つてついていった。

足早に歩きながら、私はなおも食い下がった。

「ホーギーのどこに傾向があるつて？」

「うん……」そこでエリーシャは少し言いよどんだ。「でも、これ言っちゃっていいのかなあ」

「私に言えないようなことなのか？」

あえて私は少し拗ねるような口調を作った。効果的だと思ったのだが、エリーシャは微塵も動じずにあっさりと、

「ある意味では」

子は親に、ロボットは人間に似る。メリリーと同じく上っ面の態度は通用しないらしい。

「良いから教えてくれ。さもないと」

「さもないと？」
「ケツからミルクが飲めるようになるまでこの世のクソ地獄を見せてやる」

「それって具体的にどんなことするの？」

邪気のない笑顔でそう返されて、私は言葉を詰まらせた。具体的にどんなことをするのか。私だってそれを深く知りたい。知っているのはこの悪態をついていたジョニーだけだろうが、それを詳しく聞く勇氣は私にはない。実行する勇氣は言うに及ばず。

やがてロッカールームにたどり着き、私は足を止めた。彼女は女性用に特別に用意された個室に行くのだ。聞き出すことの出来る時間は終わってしまった。

そう思っていたが、同じくエリーシャも足を止めた。

「まあ、教えても良いけどね。どうせ教えたってリツキにはどうにも出来ないことだから」

「リツキ、あるいは……」私は舌打ちした。ここで彼女の機嫌を損ねるのは得策ではない。「それじゃあ、防ぎようがないじゃないか」

「うっん。少なくとも、私は何とかできるよ。それが分かっただけで、ミスター・ホーグはこれまでみたいに百パーセントの自信を持って盗塁できなくなっただんじやないかな」

なるほど、と私は思った。一度の失敗。それはもう、ホーギーの足枷として絡みついた。彼はこれまでのように成功だけを信じて足を出すことができなくなる。一度でも迷えば、もうそこからは中々抜けられない。特に、失敗することで試合を終えてしまったなんていう経験は、容易に振り切れるものではない。その根柢の「なにか」がなんだったかにもよるが。

エリーシャは私の方に向き直り、観念したように一つ大きく息を吐いた。振りをした。

「あのね、ミスター・ホーグはね、盗塁する直前、じっと投手の目を見るの。右投げの人の場合は、これは私の考えなんだけど、サイン交換した後のランナーを窺う時の目ね。だから左投手の方が彼にとっては楽なんじゃないかな。だからこそ隙をつけたわけだけど」

「はあ？」

それが一体なんの傾向になるのか。そんなこと、どんな選手だってやっている。

「でもね、私、昨日のメンテナンスの後、リツ……リツキの家にいく前にね、これまでのミスター・ホーグがウチから盗塁したときのビデオを全部見てきたんだけど……キャッチがリツキじゃないときとリツキのときと、私たちピッチャーの目がなんとなく違って見えってきたの」

「なにを馬鹿な……」

そんな馬鹿な話があるか。私は呆れかえった。目がなんとなく、だと？ そんな不確定要素満載な話を自信たっぷりと言われても失笑するだけだ。

「具体的にはどの辺りが？」

「私の『なんとなく』を事細かに説明してもいいけど、眼球のどの部分がどんな風に動いてどんな違いがあるとか、私にしか分かりよ

うがないことだからやめとく。意識してないポイントだし意識できないポイントじゃない。どうにもならないし、考えすぎちゃっても仕方ないよ」

「でも、ホーギーはそれを見抜いていたんだろ？」

だから今日までこれほど完璧なスタートを切れたのではないか。

私の言葉に、うーん、と首を捻りながらエリーシャは苦笑した。

「すごい感覚的に、だと思っけどね。だから私は目を瞑って投げてやったわけ。さすがに視覚情報をカットして投げるのは凄く難しかったけど、まあ、結果はあの通り」

私はもう我慢の限界だった。エリーシャの肩を掴み、俯いてする様に声を絞り出した。

「なあ、エリーシャ。もったいぶらないで教えてくれ。私るときと他の捕手のとくと、君らにどんな違いがあるって言うんだ？」

どうしても知りたい。たとえ自分にはどうにもできないことなのだとしても、自分が彼らになにもしてやれないのだとしても、それは私の捕手としてのプライドに関わる問題だった。

私は単なる壁ではない。私は投手という存在を輝かせるために存在する。嘘もつこう。嫌われることだってやるう。だが、足を引く張るなんていうことだけは、絶対に我慢がならない。それは、海を渡ってこの場所でもうやくやっていけているという、強肩好守の捕手という私の形容などは及びも着かない、私が捕手として持っている唯一の矜持だった。

私は必死だった。たとえこの日のエリーシャのおかげでその「なにか」が効果を失ったのだとしても、私は絶対にそれを知らなければならぬ。私にはその権利があるはずだ。

やがて、何かを感じ取ったかのようにエリーシャはそっと私の右手に手を重ねた。

「感覚的な説明するね。信じられないかもしれないけど」顔を上げると、彼女は優しく微笑んでいた。「私はね、ううん、ウチの投手は皆ね、リツキのことを信じてるんだ。リツキがマスクを被ってサ

インをくれるだけで、絶対に後ろにそらさないって感じで大きく両手を広げてくれるだけで、ピンチになってマウンドに声かけにきてくれるだけで、リツキは私たちを勇気付けてくれるの。自分がサイ・ヤング賞クラスの投手だって勘違いできちゃうの。自分じゃ分かってないのかもしれないけど、リツキってそういうキャッチャーなんだ。だからリツキのミットにボールを投げるその瞬間、さあ、投げるぞっていうあの時、ほんのちょっとだけど、つい安心しちゃうの。それが目にちよこつとだけ出てきちゃうんだよ」

「それである時、目え瞑って投げやがったつてのかわか？ 驚き半分、呆れ半分にホーギーは首を振った。「とんでもねえな。普通分かっててもやるか？ 公式戦の真つ最中で、一点リードの九回二死一塁でランナーが俺だぞ？」

私もそう思った。あれが万が一、暴投にでもなっていたらどうなっていたのか。想像するだに恐ろしいことだが、その時のエリーシヤの答えはわかっている。きっと自信たっぷりなこういはずだ。「ほら、盗塁はさせなかつたでしょ？」

私は自分のおかしな空想にかすかな胸の痛みと懐かしさを感じ、喉の奥で笑った。

「どうした、イバ？」

「いや、なんでもない。さあ、答え合わせを始めようぜ。あの子の考えは当つてたか？」

「どうだかな」

「ここまできて、誤魔化しはなしだ」

「あれは俺の飯の種の一つなんだ。またお前さんと違うチームに行ったら稼がせてもらわないといけないからな。そんな時のお前さんがまだまだ現役でいるならだけ。な、リツキ坊や」

「ホーギー、あんたいくつまでやる気なんだ？」

「走れなくなるまでさ」

ホーギーは遠くを見るような目で、マウンド上を見た。そこにい

るのは炎上しかけているウチの投手。彼はトミー・ジョン手術を終えて復活を目指すかつてのシカゴのエースだ。去年、デッドラインギリギリのトレードで獲得し、今年の開幕マウンドを任された。名前は……忘れてしまった。結局このシーズンだけでカットされてしまったから。

ウチの投手はイラついた様子を隠しきれずにうろつくと動き回っては、指先をなめ、マウンドの傾斜をならし始めた。落ち着く時間が、誰かが落ち着かせる必要があるのは明らかだった。

「ああいう場面、お前さんなら間を取るだろうな」

私の心を取ったようなホーギーの一言に、私は苦笑を返した。「どうだかな。いちいちキャッチャーが来るのが気に入らないってタイプもいるさ」

「お前さんは、そういうのをきっちりわきまえてる男だよ。だから皆がお前さんを信じてた」

「……誰かと間違えてるんじゃないかな」

私は今も自分がそうであるかどうか、自信がなかった。いや、今も昔も、エリーシャにそのことを聞いたときでさえも。

エリーシャの言葉が本当かどうかは分からない。そもそも彼女の言う通り対応の仕様がなしたことだし、確認のしようもないことである。もちろん、本当だとしたらそれは嬉しいことだ。だが同時にそれが幾分、彼らが敗戦投手としてすくすくクラブハウスに戻る原因になってしまったのも事実。私が必死の思いで獲得した信頼が仇になるなんて、確かに私にはどうにもできない。

どうにもできない。でも、だとしたら、とても本望なことだ。結局、間をおかずにプレイのコールがされ、私の舌打ちと共に、今度は白球がレフトスタンドに消えた。監督がブルペンとやり取りを始めているのを尻目に、ホーギーは立ち上がった。

「出番が回ってくるかもしれないから。バットを振ってこよう」
そう言って彼は私の膝を二度叩いてから前を横切り　立ち止まった。

「どうかしたか？」

「初めて会ったときのこと、覚えてるか？」

「ああ、忘れようもない。あんたがテレビのリモコンを壊したくなるほど怖くなったのは、あの試合からなんだ」

「弁償はしねえぞ？」彼はくすりと笑ってこちらを見つめ、続けた。「試合じゃなくてな、初めて会ったときだよ。ジョニーと一緒に」

もちろんだ、と私は頷いた。そして、あの時の私の若さ溢れる態度と、彼のアメリカンジョークを思い出し、吹き出しそうになるのを必死で堪えた。

「生意気そうながキだと思っただろ。あの時の私に謙虚さを教えてやりたいよ、ホーギー。あんたほど謙虚な男はそうはいないからな」私は笑いを交えてそう言ったが、ホーギーから陽気な笑い声を引き出すことはできなかった。彼がこれ以上ないほど真剣な目で私を見つめ、あの時な、と呟いたので、私は居住いを正した。

「……あの時に、ジョニーがどれだけお前さんのことを信頼しているか、確信できた。違和感を感じたのはビデオで何度かあいつの試合を見ているときだったが、直に会ってみて確信できたよ。ジョニーの奴があんな風にド新人を扱うことなんて滅多にないことだし……一番はお前さんの眼かな。ビシビシと感じた。こいつは本物だ、と思った。だからこそ自分の感じた違和感も本物だつてな。で、実際になんとか壘に出て、自分の考えを試そうと思っただけだ。こちらとこつちを窺うジョニーの目を見て、俺は違和感を確信に変え、試した結果は、あの通り」

そういえばあの試合以来、ジョニーは私をリッキイとは呼ばなくなつた。

「他の皆は？」

「同じだよ。目を見りゃ分かる。ほれ、目は口ほどにものを言う、つて言うだろ？ まあ、中にはそうでない奴もいたが、そういうのからは俺は走らない。俺が走らなくても勝手に自滅するからな。お前さんは俺が知る限り、もっとも投手を活かす最高のキャッチャー

だよ」

彼なりの答えの提示に応え、私は肩をすくめて返した。

「そりゃ、『光栄の行ったり来たりだ』」

「なんだって？」

「ジャパニーズ・ジョークさ」私は彼の足を叩いた。私にクソ地獄を見せてくれた彼の武器を。「頼むぜ、オールデイズ・ホーギー。あんたの足が流れを持ってきてくれるって、いつだって私は信じてるんだぜ」

そうだ、信じている。いつだって。敵であったときも、味方であるときも。

私の言葉に、彼は笑った。嬉しくなって私も笑った。笑顔はプライスレス。この頃には私もプライスレスに気を払う程度の人間性を身につけていた。

「当たり前だ。俺の武器はまだまだ錆びついちやいなんだからな」
そういつて親指を上げたホーギーの顔は、八年前と同じ陽気でぴかぴかの、八年前よりも少し皺の増えた、プライスレスなスマイルだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4235ba/>

All Days Horgie

2012年1月11日05時58分発行